

肺炎球菌ワクチン（プレベナー）

肺炎球菌による病気を予防します。→[肺炎球菌感染症](#)

スケジュール

生後2か月に1回目、その後2回目、3回目をそれぞれ4週間以上あけて接種します。
4回目（追加接種）は3回目から60日以上あけて1歳（できるだけ1歳3か月までに）接種します。

生後7か月までに1回目の接種ができなかった方は接種回数が変わりますのでご相談ください。

肺炎球菌は90種類以上の型があり細菌性髄膜炎や菌血症、肺炎、中耳炎などを起こします。その中で感染を起こしやすい型に対するワクチンが肺炎球菌ワクチンです。髄膜炎は早期診断が難しいため重症になりやすく、死亡や重い後遺症の残る例もあります。肺炎や中耳炎は治りにくかったり、繰り返したりします。耐性菌も多く治療が難しいこともあります。予防接種で免疫をつけると耐性菌も予防できるので重要です。細菌性髄膜炎はかかった子どもの半数以上が0歳の赤ちゃんですから、必ず生後2か月からヒブワクチン、B型肝炎ワクチンと同時接種で受けましょう。可能であればロタウイルスワクチン（自費）も同時に受けてください。

小児用肺炎球菌ワクチンは2011年から公費助成が始まり、2013年度から定期接種となりました。公費助成以降、肺炎球菌による細菌性髄膜炎は71%減少しました。2013年からは7価ワクチンから13価ワクチンへと切り替えられ、さらに予防効果が高まっています。高齢者の肺炎球菌予防に23価ワクチンがありますが当院では取り扱っていません。

副反応

接種したところに発赤や腫れがみられることがよくあります（70%ぐらい）。しばらく小さなしこりが残ることもありますが自然になくなりますので心配ありません。接種した当日、翌日に発熱することも多く38℃から39℃を超えること高熱も時々あります（10%ぐらい）。